

2016IASL 東京大会キックオフイベント パート 5

シンポジウム

デジタル読書革命と学校図書館

日時 2016年1月23日(土曜日) 13時から17時

会場 明星大学 26号館2階202室

アクセスマップ <http://www.meisei-u.ac.jp/campus/hino.html>

参加費 無料(先着200名)

参加申込 明星大学ホームページのシンポジウム申込フォームに記入の上、送信。

<https://form.hino.meisei-u.ac.jp/2016iasl/>

米国では、昔からある街中の本屋がどんどん潰れているという。少し前は、書籍の大型チェーン店がその原因だったが、今は、電子書籍の普及のためと言われている。人々は、紙の本屋を yesterday book store と呼んでいる。

最近、その電子書籍普及の中身が大きく変わってきた。2012年、電子書籍を kindle や nook (ヌーク) のような電子書籍専用端末で読んでいた者の比率は50%であったが、最近では32%にその比率が落ち、代わりにスマホだけで読書をする者の比率が9% (2012) から14% (2015 上半期)、スマホと併用して読む者が24% (2012) から54% (2015 上半期) になったという。人々は、この変化を“デジタル読書革命”ととらえ、若者が本を読まなくなった傾向が、逆に、スマホによって読書が普及するのではないかと期待する向きさえあるという。

今回のシンポジウムでは、各方面の第一人者をお招きし、今後、わが国においてデジタル読書が広まっていくのか、その場合、従来の紙の図書で完成された学校図書館サービスの在り方をそのまま踏襲していったのだろうかといった点について、荒唐無稽な未来予測ではない合理的予見として話し合っていた。

主催 明星大学図書館情報学課程

共催 2016IASL 東京大会運営委員会、「学校図書館年」を広める会

後援 文部科学省(申請中)、公益社団法人全国学校図書館協議会、ほか

国際学校図書館協会 (International Association of School Librarianship) について

IASL は、1971年に創立された国際規模の研究団体です。毎年世界各都市持ち回りで行われる研究大会は、アットホームで手作り感満載の会合となっています。若手研究者の国際デビューにうってつけです。事業収益の一部を発展途上国、地震・台風などの被災国の学校・学校図書館支援に充てるなど、善意とやさしさにあふれた団体です。2016年は東京で開催されます。

東京大会:会期 2016年8月22日(月)~26日(金) 会場 明治大学 <http://iasl2016.org/ja/>

パネリスト

学校図書館研究者

筑波大学教授 平久江 祐司 氏

報告 デジタル時代の学校図書館

これまでの学校教育は、教科書が中心にあり、ノート、ドリル・練習帳などの紙媒体を併せて組み立てられてきた。学校図書館サービスも紙媒体の図書を中心として確立された。しかしながら、今後は、教育の営みの一部が電子的手段を用いて行われることは必然であり、そのような時代が訪れたときに、紙媒体を前提に確立した学校図書館サービスのあり方をそのまま踏襲してよいのだろうか、何が変わり、何を变えるべきか、今回のシンポジウムの核心に迫るお話をいただく。

電子書籍研究者

東京大学大学総合研究センター 時実 象一 氏

報告 米国における新しい電子書籍の動向

Kindle、iPad 以来、電子書籍の普及において、米国は、わが国よりもずっと先を進んでいる。その米国において、昨年ごろから、様相が変わりつつあることが観測されている。電子書籍研究者の第一人者である時実氏には、日米双方の電子書籍の動向と、相互の比較分析、そして、今、米国で起ころうとしている新しい変化についてご報告いただく。

読書障害研究者

専修大学教授 野口 武悟 氏

報告 デジタル読書は“読みの困難”の救世主となり得るか？

電子書籍端末の基本機能として、文字の背景色を反転させたり、音声読み上げ機能を搭載したりと、ディスレクシア（読みの困難）の子どもたちに有用な機能が簡単に組み込める。一方、紙の教科書では、ページをめくるのに困難を覚える子どもたちでもデジタル教科書なら扱えるとの報告がある。障害を持つ人々のために開発された Multimedia DAISY 図書の普及の状況も踏まえ、野口氏には、デジタル読書が障害者サービスに有用かどうか知見をご披露いただく。

子ども読書研究者

琉球大学准教授 望月 道浩 氏

報告 紙の読書とデジタル読書：デジタル読書は読書か？

そもそも「デジタル読書は読書なのか？」という根本の疑問がある。子ども読書研究者の望月氏には、紙の読書とデジタル読書を比較し、何が同じで、何が違うのかを整理していただき、子どもたちの発達と成長という観点から留意すべき点があればご指摘をいただく。自ずと学校図書館サービスの今後の姿が見えてくると期待される。

若者文化研究者

書評家・翻訳家・若者文化研究者 大森 望 氏

報告 大人の知らないスマホの世界：スマホは若者の読書離れを取り戻せるか？

SNS、ライン、ゲーム... 大人たちは、子どもたちのスマホの使い方を十分知っているだろうか？ 米国では、スマホ読書により、若者たちの読書離れを食い止めることが期待されているが、果たしてどうであろうか。若者文化研究者としても名高い大森氏には、若者たちによる最近のスマホの使い方の傾向と、スマホ読書の可能性について、知見をご披露いただく。

読書感想文専門家

毎日新聞社「教育と新聞」推進本部教育事業担当部長

須藤 晃 氏

報告 読書感想文の将来：デジタル読書時代の読書感想文

毎日新聞社は（公社）全国学校図書館協議会と共同で、毎年、読書感想文を募集し、優秀な作品を顕彰してきた。その歴史は60年に及び、わが国の読書普及に多大な貢献をしてきた。欧米では、宿題の課題図書をパソコンや読書端末で読んでもよいことにしている。本当に読んだかどうか親や教師に分かるような仕掛けになっている。デジタル読書が普及していると見てよいが、一方で、感想文のコピーの問題も指摘されている。わが国の読書感想文の最前線にいる毎日新聞の須藤氏には、デジタル時代の読書感想文の不易流行について語っていただく。

国語科教育法・読書学会会員

新潟大学准教授 足立 幸子 氏

報告 国語教育学会・読書学会における最近の研究発表の傾向とデジタル読書に関する論調

よく知られるように、司書教諭制度の不十分な学校においては、国語科教員が学校図書館の活動を支えてきた。国語科教育法の研究者として名高い足立氏は、読書学会の会員としても活躍され、同時に、読書指導という観点から学校図書館の活動にも研究領域を広げられている。そこで、読書指導とデジタル読書について、国語教育学会・読書学会における最近の論調についてご報告いただく。

司 会

明星大学 教授 二村 健

タイムテーブル

時間	内容	担当
13:00~13:10	挨拶・趣旨説明	二村
13:10~13:25	報告①	平久江
13:25~13:40	報告②	時実
13:40~13:55	報告③	野口
13:55~14:10	報告④	望月
14:10~14:25	報告⑤	大森
14:25~14:40	報告⑥	須藤
14:40~14:55	報告⑦	足立
14:55~15:20	休憩	
15:20~15:55	補足	全員
15:55~16:55	討論会	全員
16:55~17:00	まとめ、連絡事項、謝辞、閉会の辞	二村
17:30~19:30	懇親会（自由参加・高幡不動）	有志